

明

卷

八

帖

二

不許地見

二日

あけふは日陰
又降る
うらやま

不 御 堂

十子山清水
廿日午後

○小 菅 物 亭

四

日 記

天晴上社丹波川の敷くわ
さんくの御紙上は小穴くわ
桂へ退く田所敷くわ
牛座の血上敷くわのうらやま

五日

時をくわくやふく

雨氣中くわくわくくわく
御音中くわくわくくわく
くわくくわくくわく

休 閑 内 勤 の 日

○ 不 御 堂 十 子 山

代吉中の系（河）くわくわく
中の系連中（系）

九日

あふちう二人ぬんちや佛生書
川さし物さしーいけし人佛生書

子世
あ上

十日

ふのふちなふちやふちのふち

十一日

ふちふちのふち
ふちふちのふち
ふちふちのふち

ふち

ふちふちふちふちふちふちふちふち

十二日

ふちふちふちふちふちふちふちふち

十三日

ふちふちふちふちふちふちふちふち

ふちふちふちふちふちふちふちふち

ふちふちふちふちふちふちふちふち

廿七日

木曜吉

包

公

歸納保衣

右列

服

襖

右名列

松井源四郎

廿七日

木

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

八本家地元の町屋を
二つに分けて一人一人に
分けておいておいておいて
おいておいておいておいて
おいておいておいておいて

五月初四

の道は妙しくなす
乃阿のまはしくぬ
也

日くまよおやあゝ月かゝる

夢地

辞世

ち原やあゝいふの原や

八木原を
現地

(八木原を
北付九之宿

入素道

鶴賀の門
信吉や即泊

二日

。庭へさきへ何と暮る

入素道

向多草
井上五郎

上日
茶原の細物

茶五原の原やさき日く

四日

上日
茶原の細物

は阿のまはしくぬ
くばいゝききくばいゝききく

廿日

ふりや瑞雪え乃んを海に
おあふらんやとてひう白の
なりすすれえのふとあひ
つちかへけしこつあふ乃ちふ
ふあひしゆと移らん
このこ

五

此付のれやいふの憾を
某日やけの乃とていふ

可也

廿日

五月廿日此病とていふ
とつの中病のつ
えよのあきとていふ
く乃あんとていふ
のほきとていふ

可也

つ
如親子五月乃風乃

二日乃日身あつ
あつるあつる

九
回

十回

人々を以て其の心
 之を以て其の心
 之を以て其の心
 之を以て其の心

[illegible][illegible]

十日

[illegible]

松茂店、月、日、時、分、秒、入料、出料、

廿二日

十一日
十一日

前より出（る）新（しん）の（しん）素（そ）に（しん）あ（あ）る（る）
あ（あ）ん（ん）子（こ）り（り）風（ふう）り（り）り（り）音（おと）面（めん）
り（り）の（の）月（げつ）は（は）一（いち）也（や）あ（あ）の（の）
月（げつ）は（は）一（いち）也（や）あ（あ）の（の）
前（まへ）より（り）手（て）に（に）官（くわん）を（を）あ（あ）る（る）
り（り）あ（あ）る（る）も（も）あ（あ）る（る）一（いち）は（は）あ（あ）る（る）

入素秀

（入）素（そ）秀（しゆ）
素（そ）下（か）秀（しゆ）

廿二日

廿九日

入素金

（入）素（そ）金（きん）
素（そ）金（きん）

入秀物

（入）秀（しゆ）物（ぶつ）
素（そ）下（か）秀（しゆ）物（ぶつ）

入

入（り）有（り）細（こ）
素（そ）下（か）秀（しゆ）

素（そ）下（か）秀（しゆ）

廿八日

廿九日

（お中々ん降く雪のときも
白くぬれぬれはたのてー
のくぬれぬれ）

大層
ええ大層な物

二日月夜細眉はくはる陰

廿月習

中室

おひそくおひそくおひそく

廿日

おひそくおひそくおひそく

田舎とあふくおひそく

おひそくおひそく

おひそくおひそくおひそく

廿日

廿日

五

義字歸納

牛いや小いふふ

入まふ量

小いふふ

九
亮 ベイ

歸納清

小兄山北郎

馬

清 しやう

お目り

いけい乃三才世にけし
うよ代えあうやいけ乃
まうりけいあうやいけ乃

しき乃代えあうやいけ乃
けい代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃
しき乃代えあうやいけ乃

風乃代えあうやいけ乃

七日

下
月

一
日

お系



大気... 舟... 着... 国... 利... 丹... 氏... 子... 石

石... 法... 舟... 子... 石

舟... 子... 石

舟... 子... 石

舟... 子... 石

八日... 舟... 子... 石

九日... 舟... 子... 石

舟... 子... 石

舟... 子... 石

舟... 子... 石

胡椒十粒 赤小豆十粒 研し 水に漬

おろし 又法 研く 包む 包む 包む

川 揚子 乃 水 煮く 法 音 是 五 音

揚子 乃 水 煮く 法 音 是 五 音

組 有 心 研 新 磨 の 六 丁

木 性 六 丁 火 性 四 丁 七 八 丁
土 性 一 二 三 丁 金 性 五 六 丁

一
カ
性
一
カ
性

又八卦の法

一 金乾
二 金兌
三 火離
四 木震
五 木巽
六 水坎
七 土艮
八 土坤

十一日 晴

丹石
 丹石

訓蒙圖

本握

本振 同石岩桂 花リ石
桂 花リ石 白者リ
爲 銀桂 黃者 爲金桂

十日
陽吉

時之為久

橫河 久米 寺
 之 山 寺

十四日 五ノ七書

やうのく、あふのふ

十九日 未雨かす (十四日雨) 然れども
 降止み雨 五山雲よりわき入るひかり

十六日 朝の雨 小雨も通
 止む 新井

○ 未雨かす (十四日雨) 然れども
 降止み雨 五山雲よりわき入るひかり

十七日 雨
 降止み雨 大風あり 雲よりわき入るひかり

江戸

十九日 雨
 降止み雨

未雨かす (十四日雨) 然れども
 降止み雨 五山雲よりわき入るひかり

人形 志願青文 白根可
鏡家

時令 白根 結尾所

未言 錦 換所

人形 姥曾安在 河所

二本 牛原 河所

布 紅 業所

境町 姥像 十八河

名 中 河 行貝所

菊 中 河 招也所

七夕 姥 和所

人形 姥 天川河

人形 姥 天川河

人形 姥 天川河

あやゆり本名 建彦所
 おきやあひく
 近に家へえん人館すま所
 家五行もあひ 向所
 留所は向を所 細所
 古ゆり
 安ふふふふ 本町
 山奥より

祇園寺

祇園寺や人形馬鹿
 きわんをや山のうしろの半
 きわんをや山とて人をもく
 きわんをよ山とて人をもく

喝法
 下物
 下物
 下物
 下物

引く国新

近年

和分

治もあふれしやふふふ
腰すおふふふふふふ

いふふふふふふふふふ

何れの中ふふふふふ

ふふふふふふふふふ

皆をふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

和分

ふふふふふふふふふ

和分

ふふふふふふふふふ

所くゆききふふふ

武家の子に

而く、彼等が、此の如
くして、自ら、丁度、此の
の如く、かく、と、思ふ、也。

邦無小

脈位切ち

以爲後進出焉

八回

大甲山一搖浪千疊萬

海乃玄一曰乃

4. 子とては、
本
三
T
1.0
1.0

丁巳仲夏

卷之四

47

竹

子

印

五ノ下

五ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十

仙已之方然其の

平山

3

3542

1

七月四日

おのち

小土村
之助

勘定

六日

七夕七種

たは身元子より七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種

おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種

又七種

七夕やあつた
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種
おのちおのちより七種

七日

いふこと七つは先乃あるが
七つはそれもあるが乃あるが
あるが半端の七つはあつた

七ツ

地獄の七つは先乃あるが

いふこと七つは先乃あるが
七つはそれもあるが乃あるが
あるが半端の七つはあつた

星乃ある元もはそれあるが
あるが半端の七つはあつた

子孫の七つ

いふこと七つは先乃あるが
七つはそれもあるが乃あるが
あるが半端の七つはあつた

一二の七つは先乃あるが
七つはそれもあるが乃あるが
あるが半端の七つはあつた

子孫の七つ

ちりのふたふたふたふた
ふたふたふたふたふたふた

ふたふた
ふたふた

細石と焼く

廿二日又ふたふた

廿三日の夜ふたふたふたふた

廿四日の夜ふたふたふたふた

廿五日の夜ふたふたふたふた

廿六日の夜ふたふたふたふた

廿七日の夜ふたふたふたふた

廿八日の夜ふたふたふたふた

廿九日の夜ふたふたふたふた

三十日の夜ふたふたふたふた

三十一日の夜ふたふたふたふた

三十二日の夜ふたふたふたふた

三十三日の夜ふたふたふたふた

三十四日の夜ふたふたふたふた

三十五日の夜ふたふたふたふた

三十六日の夜ふたふたふたふた

三十七日の夜ふたふたふたふた

三十八日の夜ふたふたふたふた

三十九日の夜ふたふたふたふた

いふ山より七十年ありといふ
境所よりなるを牛馬といふ

大坂の北

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

こらう、大坂の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

大坂、南東、西、北、東、西の下の橋を造り

廿六日

廿七日

瑞成山北坡

二八

後利

此より水へ拂の花をいふなり
 留聲中や一本ハ根ハ根の花
 びく子言花よりタリ
 名しきり、庭前家も月
 拂ミヤチの思ふ月のみ
 石六下
 実姑セー、拂ミ花を思ふ
 子言花より言とけり
 月の月心ハ庭前家も月
 ぬ七下

貞尺
 拂の
 和泉
 物名
 石和
 石六
 石六
 石六

時

定ひちや御侍乃言行
 花乃花より言とけり
 花の花ハ根ハ根の花

花はかきき母の心、
 花乃花より言とけり
 の道より花より言とけり

花乃花より言とけり

唱和

八月朔日

八判

石六

八朔也常々朔日より
八朔也常々朔日より

三

正正正



のりてふ

治法之要

省智人圖

世智人々之云々

程氏讀書

一、
二、
三、
四、
五、

十日五十六日

以爲天下之

石
子
子
子
子
子
子
子
子
子
子

同しをよめる

秋乃夕止る之に人歸る也

宿深乃下河原乃乃

不
知
此
意

二日

そとより乃時氣れくくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり

六日

七日

くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり
くきくの時氣やれくはえり

改
水
日
改

一
素
通
已
早
知
云
一
素
通
已
早
知
云

八日

入祖

前橋御家
御作務所

御召山のやけ御作務

御召影沼進作

武利にやけやけ御作務

上代御召影沼進作

白をのり 母目ちり

かきまの道より

かきまの道より

さゝぬり 半の御召乃ち御作務

御召

御召のやけ御作務

御召のやけ御作務

御召のやけ御作務

親子一十六御召乃ち御作務
十六御召乃ち御作務

御召

探題

市中や夢にありては 雲をみれば
十六夜やさうの月をみれば

法師

法師の遠きのをみよ

ふかき淵をみれば 雲をみれば
雲をみれば 雲をみれば

雲をみれば

法師

おろしき雲をみれば 雲をみれば
おろしき雲をみれば 雲をみれば
おろしき雲をみれば 雲をみれば

法師

法師やれむ 法師やれむ

法師

法師やれむ 法師やれむ
法師やれむ 法師やれむ
法師やれむ 法師やれむ

法師

法師

二つは、（一）、（二）

十月廿四日

救生會
救生會
救生會
救生會
救生會

子魯詩

卷一

月くら大牛とやとをいふ

素鶴

勺之羹

海と云ふ心を云ふ、月と云ふ

五

花月や雪のちさぐり川の流る

書

石月如馬

52

名のやうな人々

卷之五

今望

若月也すゆはえへは仲の身

小
大

勺斗

花田や庭上花ふきの

子

夕斗

昔はもろくも月を
葉浸れに中一か
若月やふと云く
月を青海に拂く
風吹くやと云く
若月や花乃海
若月や花乃海
鴈吹と鳩乃

探歌

曾水
木雪
春四
丁吟
若輝
若雪
紫紫

十六日

十九日

衣止に蓮乃所文

奈奥

川向のん

物もいかにいかに

十六日

十六日やふと云く

若水

云月や花乃海

若水

分好のりといふもの
 といふものといふもの
 しもふとふとふと
 といふものといふもの
 といふものといふもの
 といふものといふもの

柳下やきききき
 (む)ききき
 入部
 十月
 伊予素菊

十日

入部物

有物
 伊予素菊
 伊予素菊

十日

伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊

十日

十日

伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊
 伊予素菊

羊面識花初二十春

飾
一日備

一日傍のいふを口を聞き
のいふとゆふにみ
二あきかうふにゆふに
ゆふ多しうふにゆふ
ゆふ多しうふにゆふ

え上れしゆふにゆふにゆふに

ゆふにゆふに

ゆふにゆふにゆふにゆふに

十四日

ゆふにゆふにゆふにゆふに

生にゆふにゆふにゆふに

ゆふに

ゆふにゆふにゆふにゆふに

ゆふに

十五日

ゆふにゆふにゆふにゆふに

十六日

中江田乃秋あやをひれしる 湯田

服書う身ち秋の文の
一使つていひれしる也の
つていひれしる也の

長き秋あやひちひし一使つ

十九日

二り事をいひしる也の
一日井井日、也秋あや

九月一日

中江田乃秋あやの
一使つていひれしる也の

四日

時よむいひれしる也の

湯田

服書う身ち秋の文の
一使つていひれしる也の

つていひれしる也の

羊のひら

正しき

秋あや

湯田

入神しる也の
十月十日

羊の
湯田

九日

中江田

十日

ふりくつてん 石のまやめ 常圓

まじりし 常圓のまやめ 常圓

川筋を おやめ 人の身

水 常圓のまやめ 常圓

香 常圓のまやめ 常圓

常圓のまやめ 常圓

く 常圓のまやめ 常圓

夕4

七 常圓のまやめ 常圓

秋 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

秋 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

夕4

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

あ 常圓のまやめ 常圓

多しうし葉とえ葉は十日うも
 ちりく葉かう先はは目うも
 秋あう十日も葉のさう中
 ちう四

秋花

長き秋やふじ花うりうち
 余真花葉
 秋花のり画

ちほり花うりうち
 秋のり画
 ちほり花のり画

十一日

廊下大和南

秋のり画
 ちほり花のり画

十二日

秋花

ちほり花のり画

あはれつらねも是のちの月 留

月や清く白くあふる月 素之

十箇月とせし月

光る母の影と月と 十箇月

みれあふる月と月と 十箇月

秋の月も白くあふる月 常

持井もて代ふる月 若

花を子素足は光る月 下

月や清く白くあふる月 金

文くく風やとせし月 四

月や清く白くあふる月 七

月や清く白くあふる月 素

月や清く白くあふる月 雨

月や清く白くあふる月 可

標記

何れも此の如くして、先づ其の
 やそのとよきや千曲のありけり
 きけむをいふに、かきやなむ

新定車工要法

知不足齋

糸子

茶の湯や：いたやゝのり

陸子

付句

いんぎん

芳子集

本邦と之の地や果

爲子云

九日
——
一
二
三
四
五
六
七
八
九

房
子
こ
ら

新考やき？の四巻とあり

卷之五

うせの
とと
は
は
し

13

付

代句

49.

奇

行句

わくちくは世のなりをいふこと

何々

十二日のこと

川邊のふかふかの草花

本名流

一、明之堂卯九月十日

道

写集

01013

805

群馬県立文書館